



株主の皆様へ
2010年度第2四半期のご報告

2010.4.1…2010.9.30 あ株式会社



MESSAGE

株主の皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。
ぴあグループの2010年度第2四半期決算をご報告するにあたりご挨拶申し上げます。

ぴあグループの当連結会計年度につきましては、赤字基調からの脱却を経営の最優先課題とし、役員・社員一丸となって通期での最終黒字化を目指して経営努力を積み重ねております。

グループを取り巻く、国内レジャー・エンタテインメント市場は全体としてはほぼ横ばいの状況で推移しておりますが、縮小傾向にあった第1四半期に比べ、第2四半期に入り音楽ジャンルでのチケット販売が前年同期を上回るなど、回復の兆しも一部見られております。

そのような状況下、ぴあグループでは不採算事業の整理などの構造改革やコスト削減を継続的に進め、その効果が着実に現われるとともに、特に第2四半期において夏フェスをはじめとする大型興行のチケット販売が好調であったこと、さらには出版においてヒット商品の刊行があったこと等により、当第2四半期累計期間の業績は、売上高、利益とも期初予想を大きく上回り、黒字化を達成することができました。これもひとえに株主の皆様のご支援の賜物と厚く御礼申し上げます。

回復傾向にあった国内景気は、厳しい雇用情勢、個人消費の伸び悩み、円高などにより先行き不透明さを残しており、通期の業績に影響を及ぼすことも予想されます。しかしながら、ぴあグループの中長期的な成長の基盤となるセブン&アイグループとのアライ

アンスにおいては、11月より「セブン-イレブン」店頭マルチコピー機によるチケットの直接販売が順調にスタートいたしました。さらにインターネットによるチケット販売も好調に推移しており「ぴあ会員」が年内にも800万人を突破する見込みであることなど、グループの事業展開には明るい兆しも出始めております。勿論通期では、期初想定通りの連結黒字化を目指します。

加えて、来年1月からは本社オフィスをライブ・エンタテインメントの集積地ともいえる渋谷に移転し、業務効率、コスト効率を向上させ、心機一転いよいよ攻勢に転じて参る所存です。

株主の皆様におかれましては、引き続きのご理解とご支援を賜りますよう謹んでお願い申し上げます。



代表取締役社長

矢内 廣

*ぴあグループの最新動向につきましては「TOPICS (5～6頁)」をご覧ください

VISION <対談>

日本のコンテンツ産業の未来



ぴあ株式会社
代表取締役社長

矢内 廣 Hiroshi Yanai

秋元 康 Yasushi Akimoto

プロフィール

作詞家。高校時代から放送作家として頭角を現し、『ザ・ベストテン』など数々の番組構成を手がける。1983年以降、作詞家として、美空ひばり『川の流れのように』をはじめ、中島美嘉『WILL』、EXILE『EXIT』、AKB48『Beginner』ほか、数々のヒット曲を生む。2008年11月、ジェロ『海雪』で第41回日本作詩大賞受賞。2009年12月、第51回日本レコード大賞・特別賞をAKB48とともに受賞。1991年、松坂慶子・緒形拳主演『グッバイ・ママ』で映画監督デビュー。企画・原作の映画に『着信アリ』シリーズなど。2005年4月、京都造形芸術大学教授就任。2007年4月、同大学副学長就任。TV番組『とんねるずのみなさんのおかげでした』などの企画構成、新聞・雑誌の連載など、多岐にわたり活躍中。アイドルグループ“AKB48”“SKE48”“SDN48”“NMB48”の総合プロデューサーも務める。著書に小説『家の背中』（扶桑社）、『企画脳』（PHP文庫）ほか多数。2010年は3月に渡辺晋賞受賞、6月に日本放送作家協会理事長就任、9月に日本音楽著作権協会（JASRAC）理事就任。

AKB48成功の秘密①：ライブが原点

矢内：今日は秋元さんに、日本のコンテンツ産業の未来についてお話を伺おうとお出でいただきました。まず、今や国民的アイドルに成長したAKB48の成功の要因について教えてください。

秋元：AKB48の成功の要因って、正直よくわからないんですよ。矢内さんには、2007年にAKB48の北京での公演を観ていただきましたよね？あの頃から、やっていることは同じですから。“面白い”という小さなたくらみが、大きく広がったといった感じでしょうか。ぴあ総研のデータにもあるように、音楽や映画が不正コピーや違法ダウンロードなどで市場自体がシュリンクしているという現状がありますが、コピーすることのできないライブは堅調です。僕が高校生の頃の「ぴあ」もそうですが、東京キッドブラザース、ミスタースリムカンパニー、夢の遊眠社、第三舞台、第三エロチカなど、急速にファンが増えていった劇団を数多くライブで見してきました。

それがものすごく羨ましかった。そんな思いもあって…秋葉原に劇場をつくり長い間続けていけば、何かが始まるのではないかと思いAKB48を始めました。結果論で言えば、ライブが堅調という今の時代にぴったりマッチしたということですね。

AKB48成功の秘密②：オリジナルの持つ強み

矢内：以前秋元さんと、能や歌舞伎などの古典芸能以外で日本から海外に発信できるコンテンツは何があるんだろうという話をしました。クラシック音楽で、日本のアーティストが世界コンクールで1位を獲得したとしても、彼らが海外で演奏会を継続的に開き、成功することはなかなか難しい。欧米などは、クラシックは自分達の国が本場だと思っていますから。海外の文化土壤に存在しないもの、まさにオリジンなものでないと通用しない。AKB48はまさに日本のオリジン。秋元さんはシンガポール、マカオ、モス



クワまでAKB48という日本発のオリジナルコンテンツを持っていて、それぞれの土地で根付かせるという壮大なチャレンジをされていますね。

秋元: 僕は海外戦略などと大仰に構えていません。ただ、こういうのを見せたら海外の人はどういう反応をするんだろうというお試し感覚でやっています。ニューヨーク、ロス、カンヌ、パリ、北京でもステージをやりましたが、特に欧米の反応は面白かった。彼らはまず驚くんですね。ダンスも歌もこんなに下手な子たちは見たことがないと。はじめの3曲は皆きょんととしてあっけに取られているんですが、4曲目からは異常に盛り上がる。そして最後はスタンディングオベーション。見たことがないもの、そこに勝機があるんです。

よくAKB48はK-POPアイドルと比較されますが、少女時代やKARAは完成形。彼女たちはダンスも歌もうまいし、スタイルも良い。レッスンやオーディションを繰り返し、その中からレギュラーメンバーを決め、さあ完璧という段階まで来て初めてゲートが開く。AKB48はその段階に達するまでのプロセスを見せているわけで、そこが面白いんですよね。普通そのプロセスは見せません。AKB48は、普通の小中学生や高校生たちがぞろぞろ集まってきて、ダンスレッスンを始めたところからステージに立たせるわけです。

AKB48成功の秘密③：インターネットの情報伝達力

秋元: AKB48は80年代に人気を博したおニャン子クラブともよく比較されます。一言で言うとおニャン子クラブはテレビのアイドルで、AKB48はネットアイドルです。秋葉原での公演には毎日3万人ほどの応募があるのですが、劇場には250人しか入れません。ほとんどの方が見られないわけで、そういう方たちは主にインターネットで情報を得ています。20年

前だったらAKB48はここまでヒットしていないでしょうね。実際、ファンの方たちは、劇場、コンサート、テレビで彼女たちが動いている姿を見ているわけですが、インターネットというバーチャル上での人気もあると思います。つまりそれが、リアルとバーチャルを行ったり来たりしているAKB48の面白さです。そういう意味で、インターネットによりロコミのスピードが猛烈に早くなった今の環境で「光」が当たるようになったんでしょうね。

矢内: それがライブ(リアル)に繋がっていくということが面白いんですよね。リアルに3万人も集まって、実際は250人しか見られないという希少価値をつくった。ライブで見える感動は別物ですからね。

エンタテインメント産業が日本を強くする

矢内: 今の日本経済は元気がありませんが、エンタテインメント産業、コンテンツ産業に政府はもっと力を入れるべきだと思います。

秋元: 日本では、重厚長大と言うんですか、そういうものが基幹産業というイメージがありますよね。韓国、台湾、中国などはソフトの重要性に既に気付いています。日本はまだまだです。

矢内: それに一番最初に気付いたのはアメリカでしょうね。ぴあ総研の調べによると、日本国内のライブ・エンタテインメント市場規模は約1兆1,500億円前後で、ここ数年不況で個人消費が下がっていると言われてるのに、ほぼ横ばいで推移している。これはある意味堅調な産業と言えます。面白いのは、日米のエンタテインメント産業の格差が約3.3倍あって、GDP総額の格差2.9倍を上回っているという点です。これは、日本のエンタテインメント産業はまだまだ伸ばせる余地があるということです。このような状況の中、秋元さんが果たしている役割は色々な意味で非常に大きいと思います。

秋元さんもメンバーとなっていっしょにいますが、先日「観光庁アドバイザー」の第一回目のキックオフ会議がありまして、そこで日本の最大の観光資源はエンタテインメントだという話をしました。インバウンド政策として考えなければならないのは、訪日した外国人へのケアではなく、日本にやってくる人をどのようにして増やすかということです。例えば、日本で雪を見てみたいという中国人がたくさんいるとしたら、北海道にきちんとした劇場つきのホテルをつくったらどうか。ラスベガスの「シーザース・

パレス」で行なわれているセリーヌ・ディオンのショーのように、アジアの国々で人気のある有名アーティストのステージをそこでロングラン公演を毎日行なって、雪、温泉、美味しい料理・お酒をセットで提供するわけです。それこそがインバウンド政策ではないかという話をしました。また日本は世界中の良質なエンタテインメントが楽しめる珍しい国です。2006年にマドンナが来日した際に、当日会場に中国人の若者が大勢いるんですよ。彼らにどこでチケットを買ったのか英語で尋ねると、「PIA」と答えるわけです。アジアの人たちが自分たちでちゃんと情報にアクセスし、行きたい公演の席を押さえ、それを観るために日本までやってくる時代になったのだと実感しました。

オリジナリティがぴあの生命線

秋元: 僕は20年以上前から「ぴあ」を見ていました。創刊したばかりの頃からですね。高校3年生くらいだったかな。「はみだしYOUとPIA」というコーナーによく投稿していました。今で言えば、インターネットの掲示板への書き込みですよ。それと「2001年宇宙の旅」の再上映。それから、予告編大会。

矢内: あれは「ぴあテン・もあテン」のイベントですね。読者投票により映画などのベスト10を決めます。100位から順にその作品の予告編を上映していくんですが、1位に関しては予告編を流した後、本編を上映する企画でした。

秋元: 矢内さんにはずっと申し上げているんですが、ぴあはもともと最大公約数ではなく最小公倍数。AKB48が秋葉原で始まったとすれば、ぴあは猿楽町(1974年、千代田区猿楽町に会社設立)から始まっているわけです。僕が「ぴあ」を見てワクワクしていた頃は、矢内さんを含め、映画が好きで、面白いこと好きな数人が集まり、どうしたらもっと面白くなるんだろうとコツコツコツコツ考えていたんじゃないかと思うんです。その機動力、オリジナリティこそがぴあの生命線です。企業としてどれだけ大きくなるのが、世の中がどれだけ進歩しようが、大切なものはクリエイティビティだったりオリジナリティだったりするんです。これがある限り、ぴあは面白くあり続けられると思う。インターネットにさらにシフトしていくのか、それとも他企業とアライアンスを組んでビジネスを行なっていくのかなど、方法は色々あると思いますがそこに「遊び」があるかどうかが重要

です。
矢内: 逆に言えば、ぴあが会社としてステップを踏んでいく中で、秋元さんにおっしゃっていただいた部分がどこかで薄れてきたということ。改めて取り戻す必要があると思っています。

秋元: “ぴあイズム”はまだ絶対に残っています。それは矢内さんを見ていればわかります。しかし、ぴあに新社員で入ってくる人たちは、矢内さんたちが猿楽町で楽しみながらやっていたのを知らず、チケット販売会社、出版社、エンタテインメント業を営む大きな会社としてぴあを見ている。しかし中身はそうじゃないんですよ。そこに若手社員たちが気付いて、何か面白いことをしたいと思う人たちがもっと出てくると良いですね。ぴあがすごかったのは、他人がなんと言おうが関係なくて、そこに“想い”があったということ。ある日突然「2001年宇宙の旅」を上映してあれだけ盛り上がるができるのはすごいですよ。今でも権利関係での制約は色々あるでしょうが、そういうことに囚われず、実現に向けて走り出すのがぴあだと思います。

矢内: 今日秋元さんに、日本のコンテンツ産業の未来についてお話を伺ってきましたが、はからずも、最後にぴあの生命線についての極めて大事な話を頂戴しました。来期からは攻勢に転じようとしている時だけに、秋元さんからの大きなエールを嬉しく思います。ありがとうございました。



7&iグループとのアライアンス 本格展開を加速

7&iグループとの協業が加速しています。11月より、店頭マルチコピー機によるチケットの直接販売をいよいよ開始。思い立ったときに店頭でチケットを購入できるこのサービスは、スポーツやイベント、レジャー施設の当日券購入などでお客様の利便性向上に大きく寄与するとともに、売上の拡大にも貢献しています。昨年12月の業務・資本提携以降、6月には、インターネットや電話で予約・購入したチケットを全国の「セブン-イレブン」で引き取れるサービスを開始。以降、チケット販促メディア「7(セブン)ぴあ」の発行や、イベントの写真をマルチコピー機にてプリントできるフォトカードサービス「メモカぴあ」等もスタート。さらに9月には「セブネットショッピング」でぴあ出版物の通販を開始するなど、7&iグループのネットワークを通じて、多面的なエンタテインメント関連サービスの開発を強化しています。



店頭マルチコピー機



「7(セブン)ぴあ」

フジテレビのエンタテインメント情報番組を提供し チケット販売を強化

エンタテインメント集団「シルク・ドゥ・ソレイユ」の日本公演最新作「クーザ」が2011年2月より開幕します。同公演の魅力や最新情報をお届けするフジテレビのエンタテインメント情報番組「エンタフル!!」(毎週日曜日放送、関東ローカル)を8月よりぴあが番組提供。チケット販売と連動し、Webサイトでは座席位置を選んで購入できる仕組みを採用するなど売れ行き好調です。マス・メディアを活用したプロモーションを通じて前売りを促進し、公演の成功をサポートしています。



Photos: OSA Images Costumes: Marie-Chantale Vaillancourt © 2007 Cirque du Soleil © 2010 Fuji Television

韓国エンタテインメントのコンテンツビジネスを強化

日本でK-POP旋風が巻き起こるなか、韓国のテレビ局SBSのグループ会社と連携し、同局の音楽番組「人気歌謡」と連動した雑誌「人気歌謡ぴあ」を9月より日本で発行し好評を博しています。この他、韓流スター等の最新情報を満載した雑誌「韓流ぴあ」の発行、K-POPの若手アーティストを集めたイベント「SEOUL TRAIN」の開催、「メモカぴあ」でもK-POPアーティストを採用するなど、韓国エンタテインメントのコンテンツビジネスも多面的に推進しています。



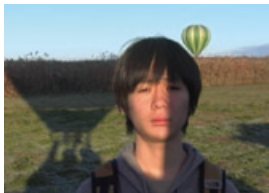
「ぴあ」別冊のビジュアル誌「SODA」発刊

「ぴあ」別冊のエンタテインメント情報誌「ぴあEX」が、ビジュアル誌「SODA」として9月に大きく生まれ変わりました。様々なエンタテインメントジャンルで活躍する、爽やかでキレイ味の良い「SODA(ソーダ)」のような魅力を持つ旬な男子の“今”をお届けしています。永久保存版のグラビア、読み応えのあるインタビュー、洗練された表紙デザインなど、大人の女性にもオススメの1冊です。



第32回ぴあフィルムフェスティバル 公益財団法人ユニジャパンと共同主催

今年で32回目を迎えたPFF(ぴあフィルムフェスティバル)。今回は経済産業省の所管である公益財団法人ユニジャパンとの共同主催となりました。日本の文化・芸術ならびに産業振興に向けた若手の育成事業を国が支援するなか、PFFは2003年より文化庁、2009年には経済産業省の後援を受けるなど、まさに産官共同で推進する映画祭として社会的価値を高めています。また今回のPFFアワードのグランプリ作品「あんたの家(山川公平監督)」が東京国際映画祭で上映、審査員特別賞作品「世界グッドモーニング!!」がバンクーバー国際映画祭でグランプリを受賞するなど、国内外の映画祭を通じて日本映画の振興に寄与しています。



「世界グッドモーニング!!」

ソーシャルメディアを活用しチケットのネット販売を強化 「ぴあ会員」年内にも800万人へ

インターネットでのチケット販売拡大に向け、各種ソーシャルメディア*を活用したプロモーションを強化しています。国内最大級のソーシャルネットワークワーキング・サービス「mixi」上にて、ユーザーの嗜好に応じたオススメの公演情報を案内し、他のユーザーと交流できるアプリケーション「めざせ!エンタメ☆マスター」を6月にスタート。9月には、動画共有サイト「YouTube」にぴあの公式チャンネルを開設し、チケット情報とともにアーティストからのコメント動画やプロモーション映像を配信しています。また、ミニブログ「Twitter」上では、チケット情報を含む最新のエンタテインメント情報を配信。これらの相乗効果により「チケットぴあ」Webサイトの「ぴあ会員」も堅調に拡大。年内にも800万人に到達する勢いです。



*ユーザー参加型メディア。個人が発信する情報が他のユーザーに伝達され、閲覧したユーザーはレスポンスを返すことができる

「ポケモンぴあ」他、キャラクタームック本が依然好調

ぴあならではの切り口で人気キャラクターを扱ったムック本が、引き続き好調な売れ行きです。「ポケモン」ゲームシリーズの完全新作「ポケットモンスター ブラック・ホワイト」を特集した「ポケモンぴあ」は、編集内容はもちろん、オリジナリティ溢れる付録も好評で、9月の発売後1週間で10万部を完売しました。この他、TV放映開始以来30年以上たった今もなおファンを魅了する「機動戦士ガンダム」を特集した「ガンダムぴあ」も好評です。



©2010 Pokémon. ©1995-2010 Nintendo/Creatures Inc./GAME FREAK inc. ポケットモンスター・ポケモン・Pokémonは任天堂・クリエーターズ・ゲームフリークの登録商標です。

東京本社オフィスを渋谷に移転 業務・コスト効率を改善

2011年1月より、本社オフィスを千代田区から渋谷区に16年ぶりに移転します。これまで6フロア12ゾーンに分散する本社機能を大型オフィスビルの2フロア2ゾーンに統合することによって、業務効率とコスト効率の向上・改善を図ります。渋谷という好立地でありながら、レイアウトの効率化により延べ床面積を30%減少させオフィス関連コストを削減。業績にも好影響をもたらすと同時に、従業員のモチベーション向上に繋げてまいります。



「スカパー!×ぴあ」を関西地区で発行

スカパー!JSAT株式会社と共同で、スカパー!/契約者向けのフリーマガジン「スカパー!×ぴあ」を11月より関西地区で発行しています(2011年3月まで毎月)。同誌は、スカパー!/契約者のさらなる満足度向上を目指し、有料多チャンネルサービスと親和性の高いライブ・エンタテインメント情報とチケット情報をまとめて宅配でダイレクトに送付。訴求効果の高い新しいスタイルのエンタメマガジンとして、読者ニーズを踏まえながら、他の地域での発行も視野に入れています。



スマートフォン向け電子書籍試験配信に参加

NTTドコモがスマートフォン向けに行なっている電子書籍の試験配信サービスに参加。映画、イベント、グルメなどの各種エンタテインメント情報に、動画や地図連携機能などを組み込んだ特別編集版「ぴあ Special Magazine」を12月まで提供しています。今後も、デバイスの特性に合わせて様々なコンテンツを加工し、より利便性の高いサービスの提供を行なってまいります。



ぴあグループの第2四半期連結業績

	2010年度9月(当第2四半)期 2010年4月1日から 2010年9月30日まで	2009年度9月期 2009年4月1日から 2009年9月30日まで	増減	2009年度 2009年4月1日から 2010年3月31日まで
売上高 (百万円)	48,747	51,023	△ 2,275	95,987
経常利益 (百万円)	16	△ 224	240	△ 642
四半期(当期)純利益 (百万円)	91	△ 306	398	△ 920
純資産額 (百万円)	3,900	1,495	2,404	3,811
総資産額 (百万円)	19,547	18,175	1,371	21,733
1株当たり純資産額 (円)	274.40	129.23	145.17	268.09
1株当たり四半期(当期)純利益(EPS) (円)	6.51	△ 27.24	33.75	△ 76.28
自己資本比率 (%)	19.7	8.0	11.7	17.4

全体概況

ぴあグループは、2010年度においては赤字基調からの脱却を経営の最優先課題とし、営業損益、経常損益、当期損益の黒字化を目指して経営努力を積み重ねております。

そのような状況下、不採算事業の整理などの構造改革やコスト削減を継続的に進め、その効果が着実に現われるとともに、特に第2四半期において大型興行のチケット販売が好調であったこと、出版においてはヒット商品の刊行があったこと等が業績に貢献しました。

■セグメント別概況

ライブ・エンタテインメント関連事業

「ファミリーマート」でのチケット販売が5月末で終了し一時的な影響がありましたが、インターネット販売が引き続き好調であることに加え、第2四半期に入り「a-nation」、「X-JAPAN」、韓流イベント等の大型興行の販売が好調に推移したこと等により収益の拡大が図れました。また、セブン&アイグループとのアライアンスにおいては、全国の「セブン-イレブン」店舗で6月1日より、インターネットや電話にて購入・予約したチケットの引き取りサービスを開始し順調に推移しております。その結果、ライブ・エンタテインメント関連事業の売上高は461億40百万円、営業利益は3億61百万円となりました。

メディア・コンテンツ事業

依然として出版販売や広告出稿が厳しい状況にある中で、配本の

この結果、ぴあグループの第2四半期連結累計期間の業績は、連結売上高487億47百万円(対前年同期比95.5%)、営業利益18百万円(対前年同期比2億38百万円良化)、経常利益16百万円(対前年同期比2億40百万円良化)、四半期純利益91百万円(対前年同期比3億98百万円良化)と、利益ベースで黒字回復するなど、期初の予想を大きく上回る形で推移しております。

効率化による収益性の改善を図るとともに、人気キャラクターを特集したムック本「ポケモンぴあ」がヒット商品となりました。その結果、メディア・コンテンツ事業の売上高は25億30百万円、営業利益は41百万円となりました。

■通期の見込み

なお、通期の予想につきましては、今後の経済環境に先行き不透明感があることを踏まえ、慎重を期して据え置いております。

期初連結業績予想と実績

(単位:百万円)

	2010年度 4月～9月(第2四半期累計)		通期期初予想
	期初予想	実績	
売上高	45,000	48,747	86,500
営業損益	△ 250	18	50
経常損益	△ 270	16	10
四半期純損益	△ 190	91	60

第2四半期連結財務諸表

第2四半期連結貸借対照表

(単位:百万円)

科目	期別	2010年9月期 (2010年9月30日現在)	2009年9月期 (2009年9月30日現在)	科目	期別	2010年9月期 (2010年9月30日現在)	2009年9月期 (2009年9月30日現在)
資産の部				負債の部			
I 流動資産		14,715	12,292	I 流動負債		14,547	15,023
現金及び預金		5,340	3,897	買掛金		12,047	12,745
受取手形及び売掛金		8,149	7,570	1年内返済予定の長期借入金		612	725
商品及び製品		63	68	未払金・未払法人税等		633	643
仕掛品		5	3	賞与引当金		4	77
原材料及び貯蔵品		5	10	その他		1,250	831
その他		1,175	757	II 固定負債		1,099	1,656
貸倒引当金		△ 25	△ 14	長期借入金		602	1,214
II 固定資産		4,832	5,882	退職給付引当金		58	49
有形固定資産		68	67	役員退職慰労引当金		100	100
無形固定資産		3,658	4,630	その他		337	291
ソフトウェア		3,470	4,496	負債合計		15,646	16,679
ソフトウェア仮勘定		111	61	純資産の部			
のれん		13	9	I 株主資本		3,881	1,476
その他		62	63	資本金		4,239	4,475
投資その他の資産		1,105	1,184	資本剰余金		402	2,933
投資有価証券		331	410	利益剰余金		△ 698	△ 5,871
その他		1,147	1,249	自己株式		△ 61	△ 61
貸倒引当金		△ 373	△ 475	II 評価・換算差額等		△ 20	△ 19
資産合計		19,547	18,175	III 少数株主持分		39	39
				純資産合計		3,900	1,495
				負債純資産合計		19,547	18,175

第2四半期連結財務諸表

第2四半期連結損益計算書 (第2四半期連結累計期間) (単位:百万円)

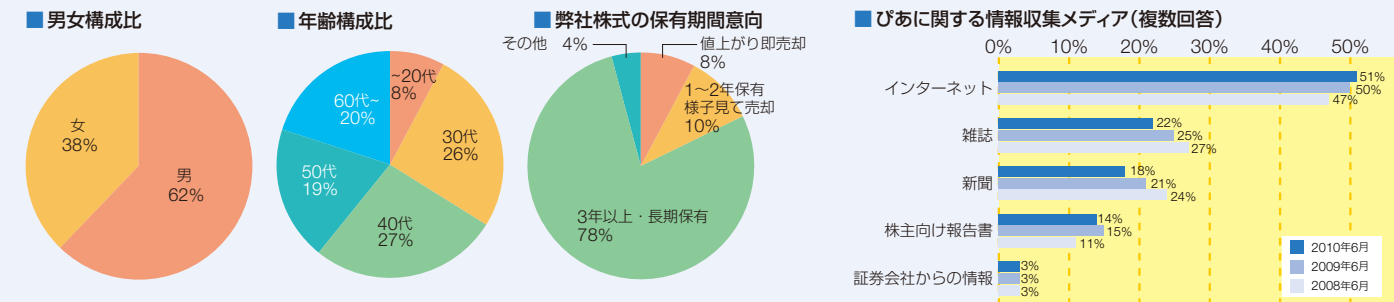
科目	期別	2010年9月期 (2010年4月1日～ 2010年9月30日)	2009年9月期 (2009年4月1日～ 2009年9月30日)
売上高		48,747	51,023
売上原価		44,873	46,801
売上総利益		3,874	4,222
返品調整引当金戻入額		278	313
返品調整引当金繰入額		247	203
差引売上総利益		3,905	4,332
販売費及び一般管理費		3,886	4,551
営業利益又は営業損失(△)		18	△ 219
営業外収益		17	29
営業外費用		19	33
経常利益又は経常損失(△)		16	△ 224
特別利益		194	3
特別損失		109	60
税金等調整前四半期純利益又は税金等調整前四半期純損失(△)		101	△ 281
法人税、住民税及び事業税		9	23
法人税等調整額		0	△ 0
少数株主利益		0	1
四半期純利益又は四半期純損失(△)		91	△ 306

第2四半期連結キャッシュ・フロー計算書 (単位:百万円)

科目	期別	2010年9月期 (2010年4月1日～ 2010年9月30日)	2009年9月期 (2009年4月1日～ 2009年9月30日)
営業活動による キャッシュ・フロー		500	△ 1,041
投資活動による キャッシュ・フロー		△ 222	△ 429
財務活動による キャッシュ・フロー		△ 329	△ 478
現金及び現金同等物に係る 換算差額		△ 0	△ 7
現金及び現金同等物の 増減額(△は減少)		△ 51	△ 1,956
現金及び現金同等物の 期首残高		5,392	5,853
現金及び現金同等物の 四半期末残高		5,340	3,897

株主アンケート結果報告

2009年度報告書に同封いたしましたアンケートにご協力いただき、ありがとうございました。今回は約5,400名の株主の皆様から、貴重なご意見・ご要望をお寄せいただきました。ここに、集計結果の一部をご紹介します。



会社概要(2010年9月30日現在)

商号	びあ株式会社(PIA CORPORATION)
本店所在地	東京都千代田区三番町五番地 19
設立	1974年12月
資本金	4,239,158千円
発行済株式総数	14,092,913株
社員数	244名
会計監査人	有限責任 監査法人トーマツ

役員	
代表取締役社長	矢内 廣
取締役	林 和男
取締役	白井 衛
取締役	唐沢 徹
取締役	夏野 剛
取締役(社外)	佐久間 舜二
取締役(社外)	富山 和彦
取締役(社外)	後藤 克弘
監査役(社外)	入江 雄三
監査役	斎藤 廣一
監査役	能勢 正幸
監査役(社外)	宮原 守男
監査役(社外)	金子 真吾

主要グループ会社

びあデジタルコミュニケーションズ株式会社
所在地/〒102-0075東京都千代田区三番町5-19
事業内容/コンテンツメディア(紙媒体・Web・モバイル)の企画・開発・販売・コンサルティング及び各種プロモーションの企画・開発業務
チケットびあ名古屋株式会社
所在地/〒461-0005愛知県名古屋市中区東桜2-13-32 びあ名古屋ビル
事業内容/中部地区におけるコンピュータチケットサービス事業
チケットびあ九州株式会社
所在地/〒810-0001福岡県福岡市中央区天神3-15-24三天第一ビル5F
事業内容/九州地区におけるコンピュータチケットサービス事業
株式会社東京音協
所在地/〒102-0075東京都千代田区三番町5-19
事業内容/音楽・演劇・スポーツ・映画・その他イベントの開催、チケット販売並びに情報提供

株式の状況(2010年9月30日現在)

発行可能株式総数	33,000,000株
発行済株式総数	14,092,913株
株主数	19,979名
大株主	
株主名	所有株数(株) 議決権比率(%)
矢内 廣	2,900,100 20.61
株式会社セブン&アイ・ホールディングス	1,409,400 10.01
凸版印刷株式会社	1,087,709 7.73
株式会社セブン&アイ・ネットメディア	704,700 5.00
株式会社セブン・イレブン・ジャパン	704,700 5.00
斎藤 廣一	636,300 4.52
林 和男	626,300 4.45
株式会社経営共創基盤	481,800 3.42
株式会社ビー・エス	420,000 2.98
株式会社サークル・ワイ	347,800 2.47
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口)	268,900 1.91
丸紅株式会社	150,000 1.06
株式会社電通	148,600 1.05
スカパー JSAT株式会社	117,300 0.83
びあ従業員持株会	103,480 0.73
三菱UFJニコス株式会社	100,000 0.71
エヌ・ティ・ティ・コミュニケーションズ株式会社	100,000 0.71
京セラ株式会社	100,000 0.71
(個人)	50,000 0.35
日本マスタートラスト信託銀行株式会社(信託口)	44,700 0.31
(個人)	43,600 0.31
株式会社WOWOW	35,000 0.24
株式会社エフエム東京	35,000 0.24
株式会社フジ・メディア・ホールディングス	33,500 0.23
能勢正幸	32,000 0.22
株式会社南日本銀行	31,400 0.22
米沢信用金庫	30,000 0.21
日本テレビ放送網株式会社	30,000 0.21
ソニー株式会社	30,000 0.21
株式会社ジェイティービー	29,200 0.20



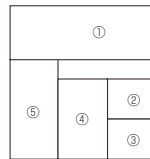
ぴあ株式会社

〒102-0075 東京都千代田区三番町5-19
 TEL (03) 3261-9111 (大代表)
 (2011年1月より)
 〒150-0011 東京都渋谷区東1-2-20 住友不動産渋谷ファーストタワー
 TEL (03) 5774-5200 (大代表)
<http://www.pia.co.jp/pia>

株主メモ

事業年度	毎年4月1日から翌年3月31日まで
定時株主総会	6月中
配当受領株主確定日	毎年3月31日 (中間配当を実施するときの株主確定日は、9月30日です)
公告方法	電子公告 <URL> http://www.pia.co.jp/pia (ただし、事故その他やむを得ない事由によって電子公告による公告をすることができない場合は、日本経済新聞にて行います。)
株主名簿管理人	住友信託銀行株式会社 証券代行部
事務取扱場所	東京都中央区八重洲二丁目3番1号 〒183-8701
郵便物送付先	東京都府中市日鋼町1番10 住友信託銀行株式会社 証券代行部
電話お問い合せ先	電話 0120-176-417
インターネットホームページURL	http://www.sumitomotrust.co.jp/STA/retail/service/daiko/index.html
特別口座管理機関	みずほ信託銀行株式会社 本店 証券代行部
事務取扱場所	東京都中央区八重洲一丁目2番1号 〒168-8507
郵便物送付先	東京都杉並区和泉二丁目8番4号 みずほ信託銀行株式会社 証券代行部
電話お問い合せ先	電話 0120-288-324
特別口座に関する事務取次所	みずほ信託銀行株式会社 全国各支店 みずほインバスターズ証券株式会社 本店及び全国各支店
単元株式数	100株

※住所変更等の事務手続きは、お取引の証券会社等にてお手続きください。



- ①「SUMMER SONIC 2010」【びあ他出資】
- ②「ルナ・レガーロ〜月からの贈り物〜」◎野村牧人【主催:びあ他】
- ③「東京グランドキッズコレクション」【企画:制作:びあ】
- ④「東京国際映画祭」◎2009 TIFF 【協賛:びあ他】
- ⑤びあ本社新オフィス 住友不動産渋谷ファーストタワー(渋谷区)

株主優待制度について

2010年3月31日現在の株主の皆様に対し、株主優待を実施します。

1. 優待品目と事前選択

チケットぴあギフトカード、オリジナル図書カード、オリジナルシネマギフトカードの3品目。

下記優待金額の範囲内で、自由に組み合わせて事前に選択していただくことができます。

2. 優待区分

株式保有期間	2期以上(1年超)継続保有の場合	保有期間が左記に満たない場合
期末保有株式数		
100株以上1,000株未満	5,000円分	2,500円分
1,000株以上	11,000円分	5,500円分

ぴあはJOCオフィシャルチケットingマネジメントとして、日本選手を応援しています。

夢先生
 ぴあはJFAこころのプロジェクトを支援しています。